シャトーブリアンと親ギリシア主義
――「ギリシアに関するノート」(1826) をめぐる一考察――

畑　　浩一郎

Chateaubriand and Philhellenism : Study on "la Note sur la Grèce" (1826) ———

During the 1820s, philhellenism, a strong political movement that favored the Greek population in their fight against Ottoman domination, emerged in France. Although Lord Byron, the British poet, is well-known for his support of Greek independence, the role played by Chateaubriand in the Philhellenic movement is often underestimated or even completely ignored. Based on a reading of "la Note sur la Grèce" (1826), which is a short note included by Chateaubriand in one of the reprints of his *L'Itinéraire de Paris à Jérusalem*, we analyze the issue of Chateaubriand's "commitment policy." In this manner, we reconsider the history of French Romanticism, in particular, the impact of philhellenism on some romantic royalists: can we find any causality between their sympathy for Greece and the political conversion of some writers such Hugo, Chateaubriand, and Vigny, who left the royalists' camp in order to join the liberals in the second half of the decade?

はじめに

1821年にドナウ河畔で始まった，オスマン帝国支配からの解放に向けてのギリシア人の戦いは，瞬く間にペロポネソス半島，クレタ島，キプロス島などに拡大する。開戦当初はギリシア軍が優勢に立ち，各地でオスマン帝国軍を撃破していく。トルコ政府は報復として，コンスタンチノープル，スミルナ居住のギリシア人を虐殺，またキリスト教徒の蜂起を阻止できなかった廉で，コンスタンチノープル総主教グレゴリウス五世を絞首刑に処する。翌1822年にはキオス島で，オスマン軍によるギリシア人の大量殺戮が行われる。この事件を題材にドラクロワが〈キオス島の虐殺〉（1824）を描いたことはよく知られている。野蛮なトルコ人に対する怒り，勇敢なギリシア人に対する同情の念が，ヨーロッパ諸国の人々の間に激しく湧き起こる。いわゆる「親ギリシア主義（philhellènisme）」と呼ばれる現象の発露である[1]。

1820年代のフランスにおける親ギリシア主義の盛り上がりは，二つの時期に区分することができる。まずは開戦当初のもので，ジャーナリズムはこぞってギリシアの情勢を伝え，この問題に関する本や小冊子も数多く刊行される。ギリシア支援のための義援金の募集が開始され，また実際に義勇兵として現地に赴く者も数多く見られた[2]。その後，運動は若干後退す

---

[1] 《philhellènisme》という言葉の日本語訳については，いまだ議論の余地がある。「親ギリシア主義」という言葉を当てるのが一般的だが，この運動は一定の学説や思想に基づいているというよりはむしろ，ギリシア人に対する同情といった感情的な側面が強い。暫定的ではあるが，本論では「親ギリシア主義」の語を当てておく。

[2] たとえば1822年11月22日にマルセイユを出港したシピヨン号（*Scipion*）には，132名の義勇兵（そのうち95名はドイツ人）を載せている。Voir Denys Barau,《La mobilisation des philhellènes en faveur de la Grèce, 1821-1829》, dans ***Populations réfugiées : de l'exil au retour***, éd. Luc Cambrézy et Véronique Lassailly-Jacob, IRD, 2001, p. 43.

[3] 理想に燃えてギリシアの地に旅立った義勇兵たちは，現地で幻滅を覚えることになる。ギリシア人たちは一致団結してトルコ軍に立ち向かうどころか，さまざまな思惑から仲間割れを起こしており，簡単にトルコ軍に寝返る者すら見られた。こうしたことについての証言が親ギリシア主義に水を差すことになり，また新聞雑誌類の関心も，スペイン立憲革命へのフランス軍の派遣など，他の事柄に移っていく。Voir Barau, art. cit., p. 43-44.

るものの[3]，1824年以降，再び大きく燃え上がる。そのきっかけとなったのが，英国のロマン派詩人バイロンのミソロンギ（またはメソロンギ）における劇的な死である。

すでに『チャイルド・ハロルドの遍歴』（1812，1816，1818）の大成功によって名を馳せていた詩人バイロンは[4]，1823年，ジェノヴァ滞在中に，ロンドン親ギリシア協会（London Philhellenic Committee）からの接触を受け，ギリシアに向かうことを決意する。古い西洋文明に幻滅していた詩人は，詩を行動に転換させるべく，新生ギリシアの創設に望みをかけたのである。バイロンは私費で船を仕立て，友人や召使いたち数人とともに，リヴォルノを発つ。現地で熱狂的な歓迎を受けた詩人は，レパント侵攻部隊の隊長に任命されるなど，来るべき戦闘に備えるが，そのさなか，不健康な気候に体を蝕まれ，三十七歳の若さでミソロンギにて客死するのである。「バイロン死す」という知らせは瞬く間にヨーロッパ中を駆けめぐる。それは各地で驚きと悲しみをもって受け止められ，同時に，あらためて「ギリシアを支援すべし」という気運を煽り立てることになるのである[5]。

バイロンほどは知られていないが，同時代の親ギリシア主義に大きな影響を与えた文学者がもうひとりいる。フランス・ロマン主義の嚆矢のひとりとされるシャトーブリアンである。ブルターニュ出身のこの作家は，ギリシア独立戦争が勃発する十年以上も前に，エルサレム巡礼を行い，その途上で実際にギリシアの地を踏んでいる。メッシニアに上陸し，ペロポネソス半島を横断，コリントス海峡を渡って，アテネから再び乗船，スミルナに向かう。当時，この地にはまだ独立の気運などみじんも見られない。オスマントルコのくびきにつながれたギリシアの現状を，シャトーブリアンは間近に観察し，考察を深める。

---

[4] 『チャイルド・ハロルド』は，英国では1812年から1821年の間に，十二回版を重ね，フランスでは1819年から1827年の間に六回再版されている。バイロン自身が日記に書きつけた「ある朝目が覚めたら，有名になっていた」という一文はよく知られている。

[5] Voir Leslie A. Marchand, ***Byron, portrait d'homme libre***, traduit de l'anglais par Odette Lamolle, Autrement, 1999, p. 541 et suiv.

作家は帰国後，旅行記『パリからエルサレムへの旅程』(1811) を刊行する。この著作は大成功を収め[6]，その後に続くフランス・ロマン主義時代のオリエント旅行のブームを準備したことはよく知られている[7]。だが作家とこの旅行記が，1820年代のフランスにおいて，ギリシア独立を支援する気運を盛り上げるための大きな役割を果たしたことについてはこれまでわずかしか論じられてきていない。本稿では，この問題を取り上げることで，作家シャトーブリアンの文学的営為に新たな光を照射し，さらには政治と文学が取り持つ，古くからの，しかし必ずしも常に顕現しているわけではない深い関係についても考察することを目指す。

1．1820年代のシャトーブリアン

1826年６月，ラドヴォカ書店より，シャトーブリアンの全集の刊行が始まる[8]。全26巻の予定のうち，第１回配本に選ばれたのは『パリからエルサレムへの旅程』である（第８，９，10巻)。ヨーロッパ中に大反響をもたらした「アタラ」「ルネ」を含む大作『キリスト教精髄』(1802) をはじめ，すでに数々の重要な著作を世に出している作家が，自らの生前全集刊行の皮切りに，20年も前に行った聖地巡礼の記録であるこの旅行記を選んだのはもちろん故なきことではない。その二ヶ月前に，ミソロンギが陥落しているのである。

バイロンの死地として知られるこの要塞都市は，知将レシト・パシャ率いるトルコ軍によって，一年もの長きにわたって攻囲を受ける。飢餓に苦

---

[6] 『パリからエルサレムへの旅程』は作家の生前，第五版まで刊行されている（1811，1811，1812，1822，1826)。またヨーロッパの諸言語にも翻訳･刊行されている。英語版一点（1811)，ドイツ語版四点（1811, 1812, 1817, 1827）オランダ語版一点（1811)，イタリア語版五点（1825，1826，1831，1832，1844)。

[7] Voir Jean-Claude Berchet,《Introduction》au *Voyage en Orient*, Robert Laffont, 1985, p. 10.

[8] この生前全集の刊行は，経済的理由による。この時期，シャトーブリアン家の財政は悪化の一途をたどっている。「今，ランドー馬車を５千５百フランという高値で売ったところです」1825年８月21日付カステラン夫人宛手紙。Chateaubriand, *Correspondance générale*, éd. Pierre Riberette et Agnès Kettler, t. VII, 2004, p. 87. なお補遺を除いた，25巻の全集の刊行で，作家は55万フランを手にすることになる。Voir Jean-Claude Berchet, *Chateaubriand*, Gallimard, 2012, p. 739.

しめられた住人たちは決死の覚悟で包囲線を突破しようと試みるが失敗，要塞に残った住人たちは自ら火薬庫を爆破し，多数のトルコ兵を道連れにして死んでいった。事件の知らせは瞬く間にヨーロッパ中を駆けめぐり，各地でギリシア人に対する同情，トルコ人に対する怒りの声が激しく湧き起こる。まさに1820年代の西洋における親ギリシア主義が頂点に達しようとする瞬間を，シャトーブリアンは巧みに捉えるのである。

この全集版『パリからエルサレムへの旅程』刊行に当たって，シャトーブリアンは，ギリシアをめぐる新たな状況に著作を対応させようとしている。まず新しく序文を書き下ろし，そこで，トルコの圧政と戦うギリシア人に対し，ただ手を拱いて傍観しているだけのフランス政府の態度を激しく糾弾する。

> 英雄的な戦いをただじっと眺めているだけのこの世紀に災いあれ！ひとつの国民が殺戮されるのを，危険を冒さず，また将来の展望を持つこともなく，放置しておくことができるとでも考えているのか！そのような過ち，いやそのような罪には，遅かれ早かれ，とてつもなく厳しい懲罰が降るだろう[9]。

この時点ではまだ，神聖同盟はギリシア問題について静観の構えを取っていた。基本的には依然としてウィーン体制が有効であり，オスマントルコへの干渉は，ナポレオン戦争後にようやく訪れたヨーロッパの安定を脅かすというメッテルニヒの主張が大方の支持を受けていたのである。フランスのヴィレール内閣もこの立場であった。

むろん外交の裏事情は極めて微妙で，前世紀後半以降，英仏露の三国は東地中海での勢力をめぐってしのぎを削っている。もしこの地域にギリシ

---

[9] Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem et de Jérusalem à Paris*, dans Chateaubriand, *Œuvres complètes*, t. Ⅷ, Ⅸ, X, éd. Philippe Antoine et Henri Rossi, Champion, 2011, p. 70. 以降，『パリからエルサレムへの旅程』，ならびに「ギリシアに関するノート」をはじめとした諸テクストはこの版に依るものとし，引用文の末尾にページ番号を示す。

ア人国家――その大部分はギリシア正教徒――が誕生するようなことになれば，これまで微妙に保たれていた勢力バランスが大きく崩れかねない。自国の利害を優先すべく，膠着状態に陥ってしまった西洋列強の消極的な態度を，シャトーブリアンは厳しく弾劾する。「ギリシアが救いを求めて差し出す手を，あなた方は握ろうとはしないのか？　結構！　瀕死のその手はあなた方に血の染みをつけるだろう。未来が，あなた方を見分け，あなた方を罰するために。」（p. 71）想起されるイメージは峻厳である。作家はまるで予言者のように,「何もしない」という重罪を犯すフランスに対し，将来必ず下るであろう厳罰を予告するのである。

この新しい序文に加えて，シャトーブリアンは1826年版『パリからエルサレムへの旅程』（生前全集）に，いくつかの議会演説の原稿や，政治パンフレットを補遺として収録している[10]。ここで着目したいのは「ギリシアに関するノート（Notes sur la Grèce）」という覚書である。全部で四十ページあまりに及ぶこのテクストは，これまでシャトーブリアン研究ではあまり取り上げられてこなかった。たとえばプレイアード版では,「ギリシアに関するノート」は「『旅程』から見てあまりに後代の書き物であるし，いずれにせよマージナルな文書[11]」であるとされ，収録を見送られている。ジャン＝クロード・ベルシェによるフォリオ版もまた同様である[12]。刊行年は早いものの，現在でも『旅程』の信頼できるエディションであり続けるエミール・マラキスの版は,「本来から言えば,『ギリシアに関するノート』はこの批評研究の枠組みには入らない[13]」と断った上で, 収録している。

無論,『パリからエルサレムへの旅程』という旅行記の作品分析を行う

[10] 具体的には「ギリシアに関するノート」,「フランス史に関する演説の抜粋（Extrait d'un discours sur l'histoire de France）」,「レヴァント諸港で犯される不法行為抑止に関する法令案についてのシャトーブリアン子爵の意見（Opinion de M. le vicomte de Chateaubriand sur le projet de loi relatif à la répression des délits commis dans les échelles du Levant）」,「大法官氏への返礼演説（Discours en réponse à M. le Garde des Sceaux）」となる。

[11] *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, dans *Œuvres romanesques et voyages*, éd. Maurice Regard, Gallimard, Bib. de la Pléiade, t. II, 1969, p. 1682.

[12] *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, éd. J.-C. Berchet, Gallimard,《Folio》, 2005.

[13] Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, éd. Émile Malakis, Baltimore, Londres et Paris, The Johns Hopkins Press, 2 vol., 1946, t. I, p. 7.

ためには，この文書はさほど参考にすべき資料とはならない。何よりも，執筆年代が違い過ぎる。だがひとたび，ひとつの独立した作品研究という枠組みから離れ，作家シャトーブリアンの思想の変遷という視座に立つと，このテクストは俄然興味深い価値を帯びてくる。現在，刊行が進んでいるシャンピヨン版のシャトーブリアン全集において，「ギリシアに関するノート」を始め，1826年版の全集に収録されたギリシアにまつわる作家の書き物が全て収録されているのはおそらくそのためである。

「ギリシアに関するノート」は，1825年７月の初版からわずか半年で，二度再刊されている。1825年12月の第二版では，本文の分量をはるかに超える，二十ページ以上の長い「緒言（Avant-propos）」が付け加えられ，また翌26年1月の第三版には，さらに新たな序文が付されることになる。版を重ねるたびに，極端なまでに分量を拡大し，また内容も過激になっていく特異なテクストである。しかもこれは，作者も言うように，そもそもが「本ではなく，パンフレットですらない」（p. 75）。作家によれば，それはギリシア支援を目的とした「特異な形態の，募金案内」なのだと言う。どういうことなのだろうか。

1825年２月，パリで親ギリシア主義協会（le Comité philhellène de Paris）が設立される。シュトゥットガルト，ロンドンなどに遅れたものの，同時期の欧米諸国に数多く誕生した同種の協会の中でも最も精力的に活動した組織のひとつである[14]。シャトーブリアンも初期から会員に名を連ねており，ヴィクトワール広場のテルノー男爵邸で開催されていた例会にはかなり熱心に通っている。死後に残された書簡からは，作家が協会の活動の一環として実際に，義捐金集め，寄付用紙の送付，領収書の発行，寄付

[14] 親ギリシア主義協会が設立されたのは，フランスでは他にマルセイユ，リヨン，ニーム，ミュルーズ，トゥールーズがある。他のヨーロッパの主要都市では，ブリュッセル，ハーグ，コペンハーゲン，ストックホルム，ベルリン，ミュンヘン，さらに北米ではニューヨーク，ボストン，フィラデルフィア，バルティモアにも設立されている。Voir Barau, art. cit., p. 44.

[15] 1825年８月６日付イポリット＝ロマン・デュチルール（フリーメイソンの高官）宛（*Correspondance générale*, op. cit., p. 83），同年９月15日付フィルマン・ディド宛（*Ibid.*, p. 81），1826年４月９日テルノー男爵宛（Ibid., p. 262），同年４月25日付フレ・ド・サルヴァンディ夫人宛（*Ibid.*, p. 171）など。

をしてくれた人への礼状の執筆などに取り組んだ形跡が見て取れる[15]。「ギリシアに関するノート」というのは，パリ親ギリシア主義協会の会員であるシャトーブリアンが，ギリシア問題にフランス国民の関心を引きつけ，さらなる募金を呼び込むために書いた文書なのである。

この文書が世に出た状況を考える上で，もう一点考慮しておくべき事柄がある。1825年８月１日付の宛先人不明の手紙の中で，シャトーブリアンは次のように語っている。「『ギリシアに関するノート」があなたが寄せてくださるような賞賛に［…］値するとすれば，それはただひたすら，著者の意図によるところなのです。私がかつて占めていた外務大臣という地位が，私の意見にある権威を付与してくれると思いました。そして私は自分の意見を人に知ってもらわなければならないと考えたのです[16]。」実際，1820年代はシャトーブリアンにとって政治の時代である。1821年にベルリンのフランス大臣（ministre de France）に任命されたのを皮切りに，同年，ロンドン大使，翌1822年にはヴェローナ会議にフランス全権代表として出席している[17]。そして帰国後にはヴィレール内閣の外務大臣に任命され，彼の政治家としてのキャリアは頂点を迎える。

だがここで青天の霹靂が起こる。次第にヴィレールに疎んじられるようになったシャトーブリアンは，1824年６月６日，突如として，外務大臣の任を解かれてしまうのである。この乱暴な更迭は，シャトーブリアンの敵方の政治家をすら不審がらせた[18]。ヴィクトル・ユゴーは直ちにオード「シャトーブリアン氏へ」を書き，その不運を慰めている[19]。だがシャトーブリアンは意気消沈したりはしない。今度は「デバ」誌を舞台に，在野か

---

[16] *Ibid*., p. 82.

[17] このヴェローナ会議は，スペインで起こった立憲革命に対して，五国同盟（四国同盟――イギリス・オーストリア・プロイセン・ロシアにフランスが加わったもの）が武力による介入を決定する。君主に対する自由主義的な民衆の蜂起という点では，スペイン立憲革命もギリシア独立戦争も類似している。ただシャトーブリアンはスペインに対しては弾圧を支持し，ギリシアに対しては支援を訴えるという矛盾を見せる。これはフランス全権大使という立場に拘束されたシャトーブリアンの言動の不自由さに起因するものと考えられる。

[18] Berchet, *Chateaubriand*, *op*. *cit*., p. 708.

[19] 《À M. de Chateaubriand》, dans Victor Hugo, *Œuvres poétiques*, éd. Pierre Albouy, Gallimard, Bib. de la Pléiade, 2 vol., t. I, 1964, p. 373-374. この詩は後に『オードとバラード』に収録される。

らかつての盟友ヴィレールに徹底的な攻撃を行うのである。「ギリシアに関するノート」が世に出たのは，このような情勢の中でであった。この文書にしばしば見られる激烈な政府批判の言葉を理解するためには，こうした事情を踏まえておく必要がある。

2．ウィーン会議と「オリエントの専制」

「ギリシアに関するノート」を詳しく読んでいくと，興味深い記述がいくつも見つかる。まず着目すべきなのは，その文体である。後になって付け加えられる「緒言」や「序文」が戦闘的とも言える苛烈さを示していくのに対し，「ノート」の表現は理性的で，比較的抑えられている。ベルシェの指摘するように，それはおそらく，この文書を読むことになる読者――シャトーブリアンと同じユルトラの代議士や，政府官僚――を説得するという目的から来ているのであろう[20]。また「ギリシアに関するノート」を読み解くにあたって，通常以上に注意しなければならないのは，この文書が書かれた際の時代状況への配慮である。それは必ずしもギリシアを取り巻く東地中海の情勢だけではない。それに加えて，いやむしろそれ以上に，フランス国内の政治状況に目を配る必要がある。

シャトーブリアンの主張には，今日の読者の目から見ると，やや奇妙に思われる箇所も見受けられる。例えば，作家は，もしトルコがギリシア独立を認めるのであれば，場合によっては，ギリシアはかなり高額の献納金をトルコに払っていくこともありうると言う。「そうすれば，万人の利益が確保されるのだ」（p. 116）と作家は自画自賛する。これはいかにも不思議な主張である。なぜならシャトーブリアンは他の箇所で何度も「トルコはギリシアに対していかなる統治権も有していない」と強調しているからである[21]。独立後も献納金を払い続けるのであれば，それは朝貢行為に他

[20] Voir Berchet, *Chateaubriand*, *op. cit.*, p. 725.
[21] たとえば次のような一文「ギリシアは，臣下を君主に，また君主を臣下に結びつけるいかなる条件も義務として負ってはいない。」（p. 113）

ならず，ギリシアはトルコの属国であり続けるということになるのではないだろうか。

実はこうしたシャトーブリアンの主張は，彼が当時の東地中海地域をめぐる状況をいかに正確に理解していたかということを裏づけている。無論，シャトーブリアンとしては，ギリシアが無条件にトルコのくびきから自由になることを望んでいる。なにしろギリシア人は「すでに政治的権利の面で［スルタンの］臣民でなかったが，自然的権利の面でも自由になった」(p. 113) はずなのである。だが機はまだそこまで熟していない。この後，英露仏の三国はウィーン体制に反する形で静観の姿勢をやめ，ギリシア問題への介入に大きく舵を切ることになるが[22]，1827年 7 月に結ばれたロンドン条約では，「ギリシアはオスマン帝国の支配下にとどまり，毎年献納金を払わなければならない」という条項が盛り込まれるのである[23]。シャトーブリアンはただ闇雲に理想論をかざしているのではない。トルコへの献納金の支払いというのは，ギリシアがまず自治権を獲得する上で通過することになる現実的なステップとなる。シャトーブリアンの主張はやはり，前外務大臣としての知見に支えられている。

その一方で，ギリシア独立の利点を強調するあまり，明らかに筆が滑ったように感じられる箇所もないわけではない。例えば作家は，ギリシアがオスマントルコから独立するのは，ただギリシア人にとってのみ価値があるだけではなく，実はトルコ人にとっても意味のあることだと主張する。なぜなら，このキリスト教徒の住む土地を切り離すことによって，トルコは「まるまるイスラーム国」(p. 116) となることができ，より純化されたその国力はさらに増すだろうというのである。だが東地中海世界というのはそれほど単純な空間ではない。そこでは，さまざまな宗教，言語，文化

[22] このとき神聖同盟の足並みは乱れ，オーストリアとプロイセンはロンドンに招待されたが，拒否している。

[23] 他にも，ギリシアの帰属については以下のことが取り決められる。1．国境線は後の協議によって確定される。2．ギリシアは自治権を持ち，自前の政府を構えることができるが，その政府はトルコの承認を経なければならない。

を持つ民族が混在しながら共存しており，たとえギリシア一国が独立したところで，その人口分布がきれいに塗り替えられることなどあり得ない。実際にこれらの土地を旅してきた人間の漏らす言葉とは思えない，あまりに単純化した見方だと言わざるを得ない。

このように今日「ギリシアに関するノート」というテクストを読み解くことは，必ずしも容易な作業ではない。慎重に当時の情勢に目を配らないと読み誤る可能性があるのである。だがそれでもこの文書は，シャトーブリアンがフランスにおける親ギリシア主義の高揚に果たした役割を考える上で第一級の価値を持っている。ここからは作家が展開する具体的な主張について見ていこう。

シャトーブリアンはここで「必ずしもギリシア人の敵ではないものの」（p. 111）いくつかの理由から，この問題に関わってはならないと考えている人々に向かって語りかけるという手法をとる。彼はその理由をひとつひとつ列挙し，それを個別に論駁していく。その理由とは，作家によれば以下の四点となる。

1．ウィーン会議において，トルコ帝国はヨーロッパの一部であることが認められた。
2．スルタンはギリシア人の正当な君主である。それゆえ現在蜂起しているギリシア人は，叛徒ということになる。
3．西洋列強が両国の仲裁に介入すれば，政治的不和が発生する恐れがある。
4．ヨーロッパの東部に，人民政府（gouvernement populaire）が樹立されるのは好ましくない。

まずひとつめの理由だが，作家の考えにしたがってわかりやすく言い直せば「ウィーン会議でトルコ帝国は，ヨーロッパ諸国の保護下に置かれ，その上でひとつの主権国家として認められている」ということである[24]。

[24] 管見によれば，ウィーン会議でオスマン帝国がヨーロッパの保護下に置かれたという史実はない。また同会議で，帝国が主権国家として認められたということも確認できない。

そしてそれがふたつめの理由に繋がり，ギリシア危機はあくまでオスマン帝国の国内問題であり，そのため帝国内の出来事に介入するのは，国際的な取り決めに反するばかりか，内政干渉になるということになる。

こうした考えに対し，シャトーブリアンはふたつの観点から反論する。ひとつは，ウィーン会議とトルコの問題は無関係であるということである。そもそもウィーン会議にはトルコは参加すらしていない。それにトルコ人にしてみれば，ヨーロッパが自分たちを保護してくれるなどというのは，想像すらしていないことである。もしそのようなことをトルコ政府が知れば「驚愕する」（p. 112）であろうし，そうした提案を「無礼千万」（*loc. cit.*）だと受け取るであろう。それゆえウィーン会議の決定などは，ギリシア問題解決のためには何ら重きを持たないというのが作家の意見となる。

ふたつめの反論は，「オリエントの専制」（despotisme oriental）の立場からのものである。古代ギリシアにまで遡るこの考えは[25]，中世以降のヨーロッパで根強く見られる。それによれば，トルコであれ，ペルシアであれ，オリエントの国々では，専制が基本的な政体となり，主人と奴隷との間には絶対的な支配関係が確立する傾向があるという。こうした主張の眼目は，ひとつに，文明化されていないイスラーム国家を断罪し，返す刀で，西洋の国家が取ってはならない政治体制モデルを提示するということにある。それゆえたとえばルイ一四世治下のフランスにおいては，王権神授説に基づく絶対王政に反対する人々，たとえばプロテスタントやジャンセニストといった宗教勢力，あるいは高等法院の高等司法官や大貴族といった層から支持を受ける。十八世紀に入ると，モンテスキューが『法の精神』（1748）においてさらに理論を体系化し，大革命期にはヴォルネーが旅行記『シリ

[25] 「非ギリシア人はギリシア人よりも，またアジア人はヨーロッパ人よりも，性格が本来隷属的であるために，なんら反感をもたずに独裁的な支配を甘受する」。アリストテレス『政治学』牛田徳子訳，西洋古典叢書，京都大学学術出版会，二〇〇一年，一六〇頁。

[26] 「オリエントの専制」については以下の論文を参照。 Jean-Claude Berchet,《Le despotisme oriental》, dans *Chateaubriand ou les aléas du désir*, Belin, 2012, p. 194-239.

アとエジプトへの旅』（1787）において，実際に現地で観察を行った事柄の成果として，主張をさらに堅固にしている[26]。

シャトーブリアンは，エルサレム巡礼旅行の時期より一貫してこの「オリエントの専制」という説を支持している。それは一見すると奇妙に思われるかもしれない。この時期彼が身を置いていた王党派の立場からすれば，絶対王政は必ずしも忌避すべき政体ではないからである。だが，オリエントから帰国後すぐに彼は次のように書くことになる。「かつて私は，その心映えと才能を尊敬している方々とともに，絶対的な政府というのが考えられる中で最良の政体だと考えていたが，数ヶ月間のトルコ滞在ですっかり考えを改めた[27]。」『パリからエルサレムへの旅程』の中でシャトーブリアンが見せる，過剰とも思われるトルコ人への嫌悪については，すでに研究者たちの指摘するところである[28]。「ギリシアに関するノート」でもそれは変わらない。作家は言う。「イスラームの専制（傍点論者）の犠牲者たちのために，カトリック教皇様の臣下に対して求めるべき自由を要求するということぐらいは，少なくとも許されてほしい。」（p. 113）

「オリエントの専制」というクリシェは必然的にシャトーブリアンを，キリスト教対イスラーム教という十字軍以来の伝統的な図式に立ち帰らせる。実際，同時代の親ギリシア主義が拠って立つ論拠のひとつは，「ギリシア人も自分たちと同じキリスト教徒である」ということであった。だがこの問題は，それほど単純なものではない。サルガ・ムッサも指摘するように，ヨーロッパには中世以来，近代ギリシアに対する根強い偏見（mishéllenisme）があった[29]。その理由はさまざまだが，ひとつには大シスマ以降，ギリシア人が正教を奉じたということがある。同じキリスト教徒であっても，カトリックとギリシア正教徒の間の溝は深い。実はシャトー

---

[27] 《Voyage pittoresque et historique de l'Espagne par M. de Laborde》, dans *Mercure de France* du 4 juillet 1807. この一文は『パリからエルサレムへの旅程』にも収録される。

[28] たとえばBerchet,《Le despotisme oriental》, art. cit., p. 212.

[29] Voir Sarga Moussa,《Le débat entre philhellènes et mishellènes chez les voyageurs français de la fin du XVIIIe siècle au début du XIXe siècle》, dans *Revue de littérature comparée*, n° 272, 4/1994, p. 411-430.

ブリアン自身も『パリからエルサレムへの旅程』執筆時においては，ギリシアの独立についてはむしろ懐疑的であった[30]。だがここではこの問題に深入りせずに，ただ「オリエントの専制」という考え方が，常に自由を求めて戦うシャトーブリアンの強い義憤の源泉となっているということを確認しておくにとどめたい。「キリスト教であるギリシア人は，[スルタンの] 合法的な臣民でもないし，また非合法的な臣民でもない。彼らは奴隷であり，真の信者の打ちおろす棍棒の下に死んでいくことを定められた犬なのだ。」(p. 113 強調はシャトーブリアンによる)

3．共和制か，君主制か

続けてシャトーブリアンは，三番めの論点の分析に取り掛かる。すなわち「西洋列強の介入は，政治的不和 (difficultés politiques) を誘発しかねない」ということである。この危惧に対してシャトーブリアンが強調するのは，ヨーロッパ諸国は武力で持ってトルコを攻撃することはないということである。「それゆえここで問題となっているのは，ギリシア独立を勝ち取るために，[西洋諸国が] 団結してトルコを攻撃し，その後，戦利品をめぐって，互いに争いあうということではないのだ。」(p. 114) すでに指摘した通り，この当時，東地中海地域の微妙な勢力バランスを壊してはならないというのが西洋列強のコンセンサスだった。トルコに対する軍事行為はそれゆえ，あまりに非現実的すぎる。

代わりにシャトーブリアンが提案するのは，平和的な「介入」，すなわちトルコとギリシアの間の外交的な「仲裁」である。具体的には，西洋列強はトルコ政府に対し，連名で文書を送付するのである。そうすればこれ以上，戦禍が拡大することなく，平和裡に問題を決着することができると作家は言う。確かに人道的で，それこそキリスト教的な解決策である。た

[30] 「だが，ギリシアはそう早くには，鎖を断ち切ることはできないのではないかと思う。[…] ギリシア人はただ専制の重みに押しつぶされていただけではなく，二千年もの間，歳をとり，堕落した民族として存続して来たからだ。」(p. 366)

だこの提案の外見の穏やかさの背後には，トルコへの苛烈な要求が隠されていることに注意しなければならない。シャトーブリアンは言う。「もしこれほど正当な抗議に耳を貸すことをトルコ政府が拒むのであれば，その拒否の直接の結果は，ヨーロッパの全列強がギリシア独立を認めるということになるだろう。」（p. 114-115）一見，提案という平和的な形を取ってはいるが，トルコにはそもそも拒否権は認められていないのである。

最後にシャトーブリアンが取り上げるのは，四つの論点の中でも最も興味深いものとなる。それは「ギリシアに共和制国家が誕生するのは好ましくない」という懸念に関するものである。こうした意見に対する作家の論駁の真意を読み解くことは，予想以上に難しい。

まずフランスの国内情勢に目をやる必要がある。ナポレオンの百日天下後，フランスでは王制が復古するが，議会ではユルトラと呼ばれる過激王党派が勢力を伸ばしていく。1815年の選挙での圧勝を受けて成立したのが「またと見出しがたい議会」（la chambre introuvable）と呼ばれたことはよく知られているが，皮肉なことに，ルイ十八世と歴代の首相は政権を安定させるために，ユルトラ勢力の押さえ込みに苦労することになる。1824年２月と３月に行われた総選挙では，またもユルトラが圧勝，「再び見出された議会」（la chambre retrouvée）が成立する[31]。同年９月にはルイ十八世が死去，代わってシャルル十世が即位する。この新国王こそ，まさにユルトラの領袖となる。ルイ十八世というブレーキを失った政府は今後，検閲の強化，亡命貴族への経済的援助など，反動政策を重ね，フランス社会は七月革命へと突き進んでいく。シャトーブリアンの「ギリシアに関するノート」が発表されたのは，このシャルル十世の即位式が行われた一ヶ月後のことである。

他方でヨーロッパの他の地域に目を向けると，この時代，過激な自由主義とナショナリズムの運動が頻発していることに気がつく。ドイツでは学

[31] 左派は改選前に持っていた110議席のうち，19議席しか確保できなかった。Voir Berchet, *Chateaubriand*, *op. cit.*, p. 705.

生たちがブルシェンシャフトを結成し，自由と国家統一を求めて立ち上がるが，メッテルニヒによって弾圧される（1815)。南イタリアではカルボナリが結成され，ナポリ（1820)，ピエモンテ（1821）で相次いで武装蜂起するが，オーストリア軍によって鎮圧される。スペインではブルボン朝の復活に反対する一派が革命を起こすが，フランス軍の介入により挫折する（1820)。国内では反動が，国外では革命が席巻し，両極端の思想が1820年代のフランス社会を極めて不安定な状態に置いていたのである。

このような時代背景の中に先ほどのシャトーブリアンの主張を置き直してみよう。そうすると，この作家の考えが浮き彫りになってくる。シャトーブリアンが指摘する，ギリシア支持に反対する人々の意見，すなわち「ヨーロッパの東部に，人民政府が樹立されるのは好ましくない」という考えは，明らかに，同時代のヨーロッパに吹き荒れる自由主義，ナショナリズムに立脚した革命運動を念頭に置いたものである。ギリシア独立戦争は，この観点から見れば，ブルシェンシャフトやカルボナリと同じ性格を持つものとなる。ユルトラの立場からすれば，これは主君スルタンに対し弓を引くという意味で許されざる反逆行為に他ならない。

この点で「ギリシアに関するノート」第二版につけられた長大な「緒言」は，「ノート」そのものよりもさらに明確に作者の考えを表したものとなっている。作家は言う。「彼ら［ギリシア支援に反対の人々］は，ギリシア人を，カルボナリやジャコバンだと見なしている。［…］ギリシア人はジャコバンではない。彼らが社会秩序を破壊する計画を表明したことは一度もないのだ。」(p. 93) ここから分かるように，ギリシア独立戦争に懐疑心を抱く人々の心の奥底にあるのは，ここ数年のドイツ，イタリア，スペインでの革命運動だけではない。彼らの嫌悪感は，まさに前世紀末のフランスで勃発した大革命の記憶から来ているのである。

ここでシャトーブリアンの試みの難しさがようやく理解できる。ブルターニュの旧貴族であった彼自身，フランス大革命では極めて悲惨な目にあっている。革命戦争で負傷，その後，英国へ亡命し困窮の日々を送って

いる。彼自身，行きすぎた革命には当然批判的な考えを持っている。それにもかかわらず作家は，このギリシア人のスルタンに対する反乱を是認するよう，それも現在議会で勢力を誇っているユルトラの代議士たちに対して説得しようと試みるのである。作家は訴える。「われらが祖国を悲嘆に陥れたあの惨事の記憶が，今日，寛大な道義に反対する人々の議論に役立っている。[...] かつてフランスの国土を処刑台で覆い尽くした，あの血まみれの自由の亡霊が，あの処刑台の上から，世界に向かって隷属状態にあれと宣告すると言うのか！」（*loc. cit.*）

ドラクロワの〈民衆を導く自由〉（*La Liberté guidant le peuple*, 1830）を引くまでもなく，最後の一文の「血まみれの自由の亡霊」（le fantôme d'une liberté sanglante）が想起させるのは女性像である。七月革命に参加する市民を鼓舞する頼もしい「自由（の女神）」とは異なり，こちらの「自由」はなんと不吉な存在なのだろう。それは不幸と悲しみと憎しみを呼び寄せる死神に他ならない。その「自由」が，トルコ人支配からの解放――つまり自由――を目指すギリシア人の妨げになってはならないと，シャトーブリアンは警告するのである。なんとも難解なレトリックである。「善」としての自由と「わざわい」としての自由が交差するこのレトリックが機能するのは，1820年代のフランスをおいて他にはない。

シャトーブリアンの見立てによれば，たとえギリシアがトルコから独立することになっても，その政体は共和制とはならないだろうという。その生活習慣と気質から，ギリシア人は君主制を選ぶだろうと予測されるのである。そしてフランスがそのような国家の樹立に貢献することができれば，それはフランス復古王制政府にとっても極めて名誉なことになると作家は続ける。「ギリシアに関するノート」の末尾に現れる次の一文は，シャトーブリアンの考えを要約するものとなっている。だが，なんと奇妙な言い回しか。

これほど多くの偉人たちの故国が解放される時代に，自らの時代を重

ね合わせることができるとは，復古王政にとって，何と名誉なことになろう！　聖王ルイの子孫たちが，王座に再び戻ってくるやいなや，王たちと抑圧された民衆の，双方の解放者になるのが見られるとは，何と素晴らしいことだろう。(p. 120)

ベルシェはこの一文に解説を加えて，「シャトーブリアンでなくては，このような組み合わせをおこなうことはできないだろう[32]」と言っている。実際ここでは「解放」という語が「復古王政」という語と並列されていることに加え，「聖王ルイの子孫」，すなわち由緒正しきフランス国王シャルル十世が，「王たち」と「民衆」に自由をもたらすことで，双方を同時に救済するということが祈願されているのである[33]。「国王」対「民衆」という従来の構図は，もはやここでは意味を失っている。

4．フランス・ロマン主義と親ギリシア主義

実際に「ギリシアに関するノート」が，世論にどれほどの影響を与えたのかを正確に知ることは難しい。分かっていることと言えば，発表されると直ちに，ドイツ語，スペイン語，そして現代ギリシア語に翻訳されたということ，それから先に見たように，フランスではわずか半年の間に，増補を重ねつつ，第三版まで公刊されたということである。バローによれば，同時代に数多く刊行された同種の文書のうち，このシャトーブリアンの「ギリシアに関するノート」と，バンジャマン・コンスタンの「ギリシア人のためのキリスト教国への呼びかけ」(l'*Appel aux nations chrétiennes en faveur des Grecs*) とが，抜きん出た反響を呼んだという[34]。言うまでもなく，ふたつの文書の成功は，書き手の名がその主要な理由となっているわけだが，

[32] Berchet, *Chateaubriand*, *op. cit.*, p. 726.

[33] ここでは「王たち」(des rois) も「民衆」(des peuples) も共に複数形で書かれている。おそらくは，ペロポネソス半島や島嶼部といったギリシア各地に散らばる各共同体をイメージしているものと思われる。

[34] Denys Barau, *La cause des grecs, une histoire du mouvement philhellène* (*1821-1829*), Champion, 2009, p. 101.

それぞれがユルトラ，リベラルを代表する文学者であることにも注意したい。しばしば指摘されるように，親ギリシア主義とは，党派を超えたフィラントロピックな現象なのである[35]。

いささか大胆かもしれないが，ここでひとつの仮説，というよりは今後の検討すべき問題を提示したい。それはフランス・ロマン主義の歴史に関するものである。文学史的に言えば，フランスにおけるロマン主義は，当初，政治思想としてはカトリック・王党派の立場を取った。1823年に刊行された「フランス詩神」（*Muse française*）誌は，短命ではあるが，ユルトラ文学者たちの機関誌となり，ユゴー，ラマルチーヌ，ヴィニー，スーメらが寄稿した。ポール・ベニシューは言う。「彼らが考えていたロマン主義とは，体制転覆の脅威に対する反撃の術を与えてくれるものであった[36]」。ところがこれらのロマン主義者たちは次第に王党派を離れ，自由主義的な立場を取るようになっていく。ユゴーの『クロムウェル』序文は，まさにこの新たなロマン主義のマニフェストとなる。

このロマン主義の方向転換が，フランスにおける親ギリシア主義の盛り上がりと同一時期に起こっていることは興味深い。ちなみに『クロムウェル』序文の発表は1827年，すなわちシャトーブリアンの「ギリシアに関するノート」刊行の翌年のことである。またかつて「フランス詩神」誌に集った王党派ロマン主義文学者の多くが，ギリシアへの同情と支援を訴える詩作を行っている。ヴィニーは「エレナ」（*Héléna*, 1821?）を，ラマルチーヌは「ハロルド遍歴の最後の歌」（*Dernier Chant du Pèlerinage d'Harold*, 1825）や「ギリシア人のための祈り」（*Invocation pour les Grecs*, 1826 ただし刊行は1830）を，そしてユゴーが『東方詩集』（*Les Orientales*, 1830）を，それぞれ発表している。

隷属状態からの解放を求めてトルコ人と戦うギリシア人の姿は，この時

---

[35] Barau, *ibid.*, p. 47.
[36] ポール・ベニシュー『作家の聖別』片岡大右他訳，水声社，二〇一五年，三一七頁。原著は以下の通り。Paul Benichou, *Le sacre de l'écrivain*, Gallimard, 1996, p. 287.

期のロマン主義文学者たちの心を大きく揺さぶる。そして彼らは詩の力によって，解放を求めるギリシア人を支援しようとするのである。英仏露の連合艦隊がトルコ・エジプト艦隊を殲滅したナヴァリノの海戦の後，ユゴーは次のように賀ぐ。

安心するがよい！　ギリシアはいまや自由の身
人殺しのトルコと　瀕死のギリシアのあいだに
ヨーロッパは再び　勢力のつりあいをもたらした
安心するがよい！　もう圧政者どもはいない！
フランスが戦い　運命が変わる[37]

ロマン主義文学者たちはこの時，政治と芸術における新たな時代の到来を予感している。もはやかつてのように，王党派はロマン主義，リベラルは古典主義という図式は成り立たない。実際1820年代半ばより，ヴィニーが，シャトーブリアンが，そしてユゴーが，王党派からリベラルに思想信条を転換させている。そのことと，自由を求めて戦うギリシア人の姿との関連は今一度検討すべき問題となる。マズレルも指摘するように，フランス・ロマン主義の歴史における親ギリシア主義の影響はこれまであまりに過小評価されて来ている[38]。

おわりに

1828年にヴィレールが失脚すると，シャトーブリアンは復権する。ローマ大使に任命されるのである。その間ギリシア情勢は進展しており，1827

[37] 《Navarin》(*Les Orientales*,1829), dans Victor Hugo, *Œuvres poétiques*, éd. Pierre Albouy, Gallimard, Bib. de la Pléiade, t. I, 1964. p. 608.

[38] Herve Maurel, *Vertiges de la guerre, Byron, les philhellènes et le mirage grec*, les Belles Lettres, 2013, p. 108. なおこの問題については次のふたつの著作が参考になる。Michel Le Bris, *Le Défi romantique*, Flammarion, 2002, Francis Démier, *La France du XIX*e siècle : 1814-1914, Seuil, 2000.

年10月のナヴァリノの海戦を受けて，フランス軍はペロポネソス半島に進駐を始めている。外務大臣ラ・フェロネは，緊迫するギリシア情勢を前に，かつての「ギリシアに関するノート」の作者に意見を求めている。だがローマからパリへ速達で出された意見書を外務大臣が実際に目にすることはない。1829年１月，ラ・フェロネは会議中に心臓発作を起こして死去してしまうのである[39]。シャトーブリアンは翌年，大使を辞任，以降は文学活動に専念し，1848年の死まで二度と政治の世界に戻ることはない。

シャトーブリアンが1820年代の親ギリシア主義の盛り上がりにもたらした効果については，いくつか証言が残っている。たとえばエミール・ジェバールは次のように言っている。「バイロン卿よりもはるか以前に，『旅程』の旅行者は，あの憐れなギリシアに心のこもった注意を向けるよう，フランスとヨーロッパに呼びかけていたのだ。[...] この書物によって，若者たちの熱狂が煽られたのは間違いない。二十年後に，その若者たちは，真の歴史を築くべく，アクロポリスの丘の下，スパルタ，アルゴス，トリポリッツァの平野に戦いに赴いたのだ[40]。」この文章が書かれたのは一九世紀も末になってからのことである。そこには時間の経過による美化が多分に混じっている可能性がある。ただシャトーブリアンの名をバイロンの名と並べて賛美する文章は，すでにギリシア独立直後から見られる。たとえばジュール・ジャナンの次の文章がそうである。「シャトーブリアンはオリエントから帰還した際，『道程』，『殉教者たち』，そしてギリシアの自由をもたらしたのだ。[...] 偉大なる詩人バイロン卿をギリシアに向かわせ，そこで死を迎えさせた，しかも羨むべき死を迎えさせたのはシャトーブリアン氏である[41]。」現在，ギリシア独立戦争との関連ではもっぱらバイロンばかりが取り上げられるが，シャトーブリアンの影響についてももっと論じ

[39] Berchet, *Chateaubriand*, *op. cit.*, p. 777. 意見書の全文は『墓の彼方の回想』（1848）に収められている。Voir Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, éd. Jean-Claude Berchet, Livres de Poche, 4 vol., t. Ⅲ, 1998, p. 321–329（Livre vingt-neuvième–chapitre 15）.

[40] Émile Gebhart,《Anniversaire Athénien》, *Journal des Débats* du 2 novembre 1895.

[41] Jules Janin,《Argument. *Itinéraire de Paris à Jérusalem*》, dans *Œuvres complètes de Chateaubriand*, Pourra Frère, t. Ⅸ, 1836, p. 205.

られてよい。

政治と文学とが異例なまでに接近し，ともに声を合わせて，自由を求めて戦うギリシアへの支援を訴えたのが1820年代のフランスである。むろんこれは文学に限ったことではなく，絵画や音楽の分野でも同様の数多くの成果が見られた[42]。キリスト教徒としての同情，トルコの圧政への嫌悪，そして人類愛が，こうした芸術創造の源泉となったのである。その中で，シャトーブリアンが果たした役割は決して小さくはない。大ベストセラー『パリからエルサレムへの旅程』の作者として，またパリ親ギリシア主義協会の会員として，さらにはかつての外務大臣として，彼の発した声は広く世論に届いたはずである。こうした一連の功績が認められ，1843年にシャトーブリアンは，独立後にギリシア初代国王として即位したオトン１世から叙勲されている[43]。勲章の名前は「ギリシア救済王立協会大勲章」という。シャトーブリアンが予見したように，新生ギリシアは君主制を取ったのである。

[42] 1826年にギャルリ・ルブランで開かれた展覧会では，実に198点の絵画がギリシア独立戦争を主題としていた。Voir Fani-Maria Tsigakou, *La Grèce retrouvée, artistes et voyageurs des années romantiques*, traduit de l'anglais par Zéline Matignon, Seghers, 1984, p. 49. 音楽では，ロッシーニ『コリントの包囲』（初演1826年パリ・オペラ座），ベルリオーズ『ギリシア革命』（1825-26）などが挙げられる。

[43] Voir Émile Malakis. éd., cit., t. I, p. 7.